

藍色の風 第 94 号 *Bando Heart Chronicle*

令和 3 年 10 月 1 日 (季刊発行) 編集発行人 医療法人坂東ハートクリニック 坂東正章
〒770-8025 徳島市三軒屋町下分 28 番地 2 <http://www.bandoheart.jp>

新型コロナウイルスの起源調査

§はじめに

前号の『藍色の風 第 93 号』では新型コロナウイルス感染症が動物由来感染症の可能性が高いのではないかと推測されるその感染形態を記しました。その際にこのウイルスが人工的に作られたものかどうか、また武漢ウイルス研究所から漏れ出してパンデミックを誘発したかどうかは、私には判断できないと書きました。その後、種々の報道がなされる中で、このウイルスが武漢ウイルス研究所から漏れ出したものではないかとの疑いが再燃し、バイデン大統領も再調査を指示しました。

こういった動きの中でアメリカから二つの公的報告書が提出されました。それらを読んだところ、状況証拠は多数挙げられていましたが、完璧な直接証拠を提示してこのウイルスが武漢ウイルス研究所から流出したと、証明できたものはありませんでした。しかし、報告書の内容を確認すると看過できない証拠が多数挙げられており、それらを無視することはできないと思いました。

このたびの『藍色の風 第 94 号』ではアメリカから出された二つの報告書を確認し、新型コロナウイルスが武漢ウイルス研究所から漏れ出したものかどうか、その主張の根拠はどこにあるのかなどを書いてみます。またウイルスを加工してウイルスに新たな機能を追加する技術(ゲノム編集)がどれほど進んでいるのかも調べたところ、驚くような技術が生み出されていることも知りました。そして、こういった技術に対して、その使用や適応対象を研究者だけに任せておいてはいけないのではないかと考えています。人工ウイルスが流出したかどうかの最終判断にはまだ日時がかかりそうですが、私のような感染症の非専門医を含め、一般の方々もウイルス研究のレベルがどのような状態になっているのかを知る必要があると思います。今回の『藍色の風』ではその部分までは記載するスペースの余裕がなく、断念しました。今後の『藍色の風』でお知らせしようと思います。なお、報告書内容と私のコメントとの混同を避けるため、報告書の文章はすべて「」で区切っています。

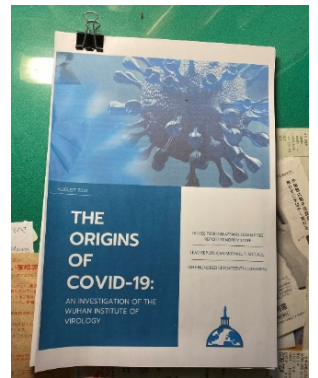
§武漢ウイルス研究所とアメリカとの関係

今年 7 月の BS テレビ朝日「報道 19:30」で、新型コロナウイルス起源に関して次のような報道がありました。

“米国立衛生研究所の Fauci (ファウチ) 所長 (右写真) が米国の NPO 法人エコヘルス・アライアンス代表 Peter Daszak (ピーター・ダザック) 氏に『コウモリのコロナウイルスがもたらす危険性の研究』を依頼し、その費用として 370 万ドルのアメリカ公的資金を融資した。そしてこの NPO 法人は武漢ウイルス研究所に対して共同研究を持ち掛け、60 万ドルを送金した。(他のメディアでは 2014 年から 6 年間に 370 万ドルの公的資金を武漢ウイルス研究所に融資したとの報道もあり、正確な融資金額に関しては調査が続いている由) その研究テーマは『コロナウイルス感染症に対してのより効果的な治療方法を探し、かつワクチン開発をするために、コロナウイルスの遺伝子を操作すること』とされ、武漢ウイルス研究所には米国の研究員も参加していた”。

武漢ウイルス研究所にアメリカの公的資金が投じられ、アメリカの研究員も前述の研究に共同研究者として携わっていたという報道に、私は驚きました。この事実も新型コロナウイルスの起源を決定づけ公表するに際して、影響を与える要因になると思いました。

他のメディアでもこのたびの新型コロナウイルス感染が「動物由来感染症による自然発生説」ではなく、武漢ウイルス研究所から漏れ出した「人工ウイルス流出による感染症」ではないかとの報道がな



されました。そういった報道も適宜参考にしながら、現在分かっている情報を記載してみます。

§ アメリカからの二つの報告書

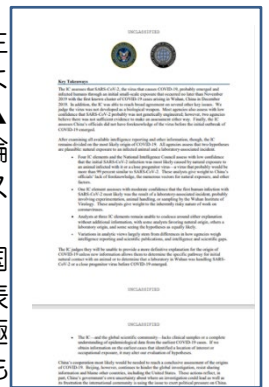
新型コロナウイルスの起源が確定されない状況で、アメリカ下院外交委員会の共和党スタッフは2020年6月に「新型コロナウイルスは、中国の武漢ウイルス研究所から誤って流出した」とする報告書を発表しています。その後も精力的な調査を続け、今年8月1日に前ページの写真のように『COVID-19の起源：武漢ウイルス研究所の調査』という表題の報告書を発表しています。84ページの英文報告書で、前書きから補遺の部分までは63ページに及びます。この報告書には非常に詳細な調査結果が記載されており、新型コロナウイルス感染症が『武漢ウイルス研究所由来』の可能性があるかどうかを判断するためにはぜひ読んでおこうと思い、和訳をしていきました。そして、その内容をこのたびの『藍色の風』で紹介することにしました。

この報告書の内容すべてを記載するにはスペースが不足し、私が重要と判断した部分を中心にして要約し記載しています。なお、64ページ以降の補遺の部分には証拠書類として中国語の添付書類などがありますが、私には解読不能なため割愛しています。原本を読みたい方は下のURLで検索してください。報告書のすべてを入手することができます。

<https://gop-foreignaffairs.house.gov/wp-content/uploads/2021/08/ORIGINS-OF-COVID-19-REPORT.pdf>

また、バイデン大統領が2021年5月26日に、新型コロナウイルスの発生源について、アメリカの情報機関が行った調査結果を公表しています。それによるとパンデミックの原因は▲ウイルスに感染した動物とヒトが接触した可能性▲武漢ウイルス研究所から流出した可能性、の2つに絞られたものの、明確な結論には至っていないとされました。このためバイデン大統領は新型コロナウイルスの起源に関して再調査を指示し、90日以内の報告を情報機関に求めました。

その報告書が2021年8月27日に、アメリカ政府の情報機関を統括する国家情報長官室から、『新型コロナウイルスの起源に関する評価報告書』として公表されました。この報告書はアメリカ下院外交委員会共和党報告書と比較すると極めて簡素なものでした。右写真のように英文1ページちょっとの文章で、内容も非常に簡潔でした。確認できるような証拠の提示は皆無で、結論だけを記載しています。その内容も和訳してお知らせしますが、原本を読みたい方は以下の単語で検索すると原文が表示されます。



(Unclassified Summary of Assessment on COVID-19 Origins) ただ、パソコンによっては英文が表示されると自動的に和文に翻訳されるような画面設定になっていることがあります。和文は機械的になされていて適切な日本語ではありませんので、興味のある方は原文で読まれた方がよいでしょう。それでは、はじめにアメリカ下院外交委員会 共和党スタッフからの報告書を紹介します。

§ アメリカ下院外交委員会 共和党スタッフからの報告書

前述のようにこの報告書は米国下院外交委員会の Michael T. McCaul (マイケル・マッコール) 氏 (右下写真) が主になって調査を行い作成しています。調査の証拠集めは、新型コロナウイルスに関して発行された医学論文、中華人民共和国の公的出版物や機密情報、関係者への聞き取り調査、メールの内容、SNSなどのソーシャルメディア上のコメントなどからなされた由です。

こういった調査の結果、新型コロナウイルスは中国武漢の武漢ウイルス研究所から、2019年9月12日以前に外部に漏れたと結論づけています。本文の前に5つの項目が重要事項として挙げられています。



- ① 「武漢ウイルス研究所がこれまでに行ってきたウイルス研究のデータベースが、2019年9月12日夜に何の説明もなく、突然ホームページから消去された。その後そのデータベースにアクセスすることができなくなっている。」
- ② 「中華人民共和国の筆頭科学者が2019年に武漢ウイルス研究所の安全性の懸念を表明し、その後、同研究所の安全性確保のために予定外の補修管理が行われた。」
- ③ 「2019年10月に武漢で開催された第7回軍事スポーツ大会に出席した世界各国の軍人に、武漢滞在中に新型コロナウイルス感染症と同様の症状が出現していた。また他の軍人の中に帰国後す

ぐに新型コロナウイルス感染症と同様の症状が出現していたことが判明した。」

- ④ 「人工衛星の画像から判断すると、2019年9月と10月には武漢ウイルス研究所周囲の病院には、通常よりは多くの車が確認された。同年9月と10月に武漢の人々が咳と痰に関してインターネット上で検索した件数が多くなっていた。」
- ⑤ 「2019年後半に中国人民解放軍生物兵器の専門家が武漢ウイルス研究所のトップに就任した。そして、中華人民共和国と武漢ウイルス研究所に勤務する科学者達が、同研究所で行われてきた研究内容を隠したりもみ消したりする行動が確認された。」

こういった事項を裏付けるために、どんな証拠を挙げてこの報告書が作成されたのか、これから記載してみます。冒頭部分には次のよう記載されています。

§ 遺伝子改変研究

「中華人民共和国及びアメリカ合衆国両国の公的資金を受けた中国人研究者及びアメリカ人科学者が、共同でコロナウイルスの機能獲得研究（ウイルスに別の機能を付与させる研究）を武漢ウイルス研究所で行っていた。しかし、こういった研究は外部にウイルスが漏れ出すと非常に危険なため、BSL-4（バイオセーフティーレベル4）という安全性が厳密に確保された施設で行わなければならない。しかし、時に BSL-2 という比較的簡単な施設で実験が行われていた。」



BSL-4 実験室と呼ばれる施設では、右の写真のような恰好で空調も完璧にコントロールした部屋で作業を行わなければならないとされています。この BSL-4 実験室での実験対象となるウイルスはエボラ出血熱ウイルス、天然痘ウイルス、ラッサ熱ウイルスなどで、感染しても治療法がなく、人から人に感染すると非常に危険なウイルスを扱うため、高度な安全設備が要求されています。それと比べて、BSL-2 実験室というのは、多くの細菌やウイルスを比較的容易に扱える実験室です。この実験室では万一研究員が感染しても重篤化せず、治療法もあり、人から人への感染の可能性があってもその危険性が低い病原体を扱っています。因みに原文には BSL-2 実験室の感染予防レベルは歯科医院と同様と記載されています。

また、なぜこのような機能獲得研究を行っていたかということに関しては、次のように述べられています。「コロナウイルスが人に感染するときには、ウイルス表面のスパイクが人の細胞表面に存在する受容体に上手く適合しなければ感染できない。人の細胞に直接感染できなかったある種のコロナウイルスのスパイク蛋白を、ヒトの免疫システムに感染しうよう作り変えることに重点を置いた研究が行われていた。なぜこのような研究を行っていたかと言えば、将来パンデミックを起こしうるコロナウイルスを特定したり、広範囲のコロナウイルス感染に効果のあるワクチン開発をしたりすることに役立つからとされた。武漢ウイルス研究所の科学者達は長年多くの研究を続けることで、他のウイルスの遺伝子を別のコロナウイルスの遺伝子に組み込むことで、人の免疫システムに感染しうるコロナウイルスを作成する研究に成功していた。しかし、そのように危険な研究が BSL-4 ではなく、BSL-2 のような簡易な研究環境で行われていた。このため、自然なウイルスだけではなくゲノム編集で作られたウイルスまでもがこの研究室から簡単に漏れ出て、社会に感染を広げる可能性があった。」

「武漢ウイルス研究所直属でウイルス研究に従事していた科学者達は、今回のパンデミックが発生する前に、ウイルスへの機能獲得、機能付与という研究に従事していたことを確認した。そして、彼らはコロナウイルス遺伝子に他のウイルスの遺伝子を組み込んで、何らの人為的な痕跡も残さずに作業を終える能力を身につけていた。アメリカのノースカロライナ大学微生物学教授である Ralpf Baric（ラルフ・バリック）氏は早ければ 2005 年から、武漢ウイルス研究所において遺伝子操作の痕跡を残さないようにして、コロナウイルスの遺伝子を改変する方法を作り出す手助けをしていた。そして、武漢ウイルス研究所の科学者達も早ければ 2016 年には Ralpf Baric 氏に教わった方法で、遺伝子操作の痕跡を残さないウイルスの遺伝子改変方法を会得していた。このことから考えると、他の科学者達が『新型コロナウイルスには人工的な操作の痕跡は全く見当たらないため、人工的なウイルスではありえない』という主張したことは正しくないと考えている。

こういった事実から我々は新型コロナウイルスが人工的に作り出されたものだとする十分な証拠があると考えており、この仮説の裏付けをするために、このウイルスが武漢ウイルス研究所で発生した

かどうかを完璧に調査することが極めて重要であると考えている。」

（2021年5月23日アメリカの新聞、ウォールストリートジャーナルは武漢ウイルス研究所の研究者3人が2019年11月に体調を崩し、病院で診察を受けたと報じた。この指摘に対して後述の石正麗氏は研究所ではそんな事例はなく、確認するので3人の氏名を明らかに、と反論した。【坂東】）

§ 隠ぺい工作

「私たちは中国政府とWHOが当初の感染を隠すために、労を厭わずに行った以下のような数々の隠ぺい工作を明らかにした。中国政府は医師に緘口令をひいた。また真実を明らかにしようとしたジャーナリストを失踪させた。彼らは研究所内のウイルスサンプルを破壊し、人-人感染の明らかな事実を隠した。そして彼らは未だにこのウイルス起源への調査を拒否している。そしてテドロス氏を事務局長とするWHOは差し迫ったパンデミックの警告を出しそびれてしまった。その代わりに彼は中国政府の説明をオウム返しのように繰り返した。それはあたかも習近平主席の操り人形のものであった。

我々は武漢ウイルス研究所の主だった科学者やその共同研究者のアメリカ科学者 Peter Daszak 氏が行った隠ぺい工作を摘発した。その事例を以下に示す。このウイルスが武漢ウイルス研究所から漏れ出たこともあり得たのではないかと質問した科学者を脅かした。ゲノム編集でウイルスの遺伝子を組み替えてもその痕跡が残らないようにできる技術はあるのに、それは不可能だと世界を信じさせるような活動をした。彼らが行っていた研究の本質について正しく伝えなかった実例が多く、またこういった研究に際しての必要な安全管理ができていなかったことも正しく伝えなかった。

こういった隠ぺい工作は新型コロナウイルスが研究施設から流出したとする可能性を調査する機会を遅らせたのだが、同時に研究所から流出したかもしれないという証拠を提供することにもなった。今回の事例で米国の公的資金が海外の研究所でどのように使われているかということに疑問が投げかけられた。またその使われ方に関してもしっかりと監視する必要がある。」

「今後の方策として Peter Daszak 氏（前述のエコヘルス・アライアンス代表）の議会証言をすべき時期になっている。彼が武漢ウイルス研究所に資金を提供して行った研究に関して、多くの未解決の疑問があり、それは彼のみが答えられるからである。」

§ 報告書が記載する新型コロナウイルスが武漢ウイルス研究所から流出したことを示すという根拠

「2019年9月12日午前2時から3時の間に、武漢ウイルス研究所のホームページに掲載されていたウイルス標本に関する公開データベースが突然削除され、以後閲覧できなくなった。そのホームページにはコウモリやネズミから集めたウイルスの標本や、その病原性に関する資料が22,000種類以上登録されていた。そしてそこにはそれぞれの標本の重要な情報が含まれていて、そのウイルスがどのような動物から採取されたか、どこで採取されたか、ウイルスがうまく分離できたか、集められたウイルスの種類、採取されたウイルスが既知のウイルスと類似性があるかどうかなどが掲載されていた。この公開データベースがなぜホームページから削除されたかの、首尾一貫した回答がなされていない。またいつ再掲載されるのか、将来再掲載されるのかどうかの回答もない。」

（これらのデータは新型コロナウイルスの起源を確定する上で、非常に重要な資料になる。【坂東】）

・「石正麗氏は武漢ウイルス研究所の責任者の一人で、ホームページ上のウイルス標本に関するデータ通信責任者とされている。ホームページから標本データが削除された理由を尋ねられて、彼女は矛盾する内容の回答をしている。2020年12月に行われたイギリスBBC放送のインタビューで、彼女は次のように述べた。『データを削除したのは研究所のホームページや研究所職員の個人メールがサイバー攻撃を受けたから。』しかし、2021年1月26日に、とある人から、なぜホームページから病原体の標本を削除したのかと尋ねるメールに対して、『新型コロナウイルスのパンデミックの最中にホームページがサイバー攻撃を受けたから』と述べた。」（ホームページから病原体の標本データが削除された「2019年9月12日午前2時から3時の間」にはまだパンデミックが発生していないと指摘され、回答に矛盾があると指摘されている【坂東】）

・「武漢ウイルス研究所のホームページから病原体のデータベースが削除された時期に、武漢研究所周囲の病院に集まる車が増えていた。ボストン大学医学部公衆衛生学教室、ボストン小児病院、ハーバード大学医学大学院のそれぞれが、衛星画像を使用して武漢の病院における駐車場の車の台数を計算した。最初の新型コロナウイルス



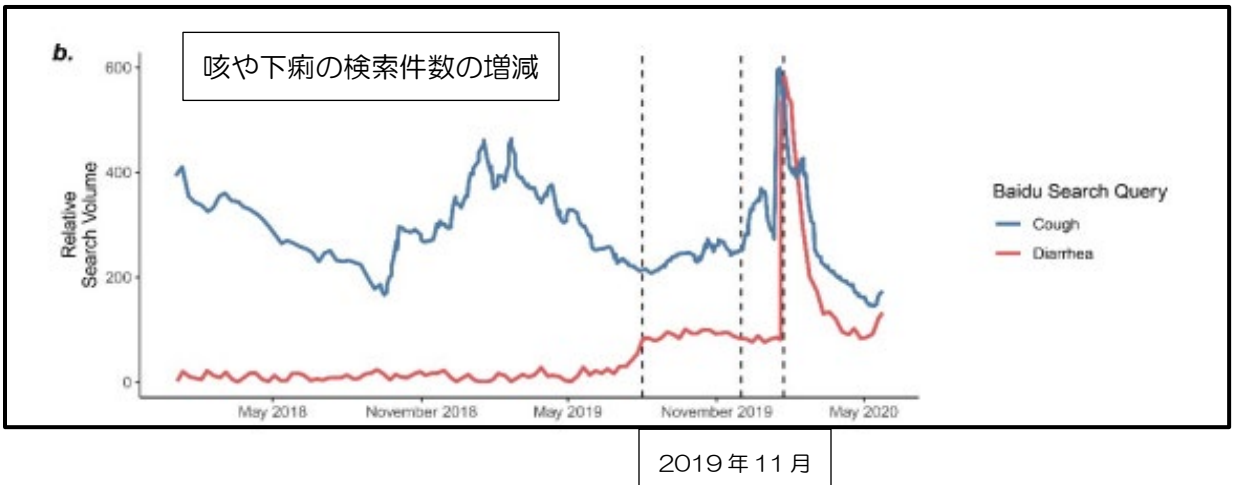
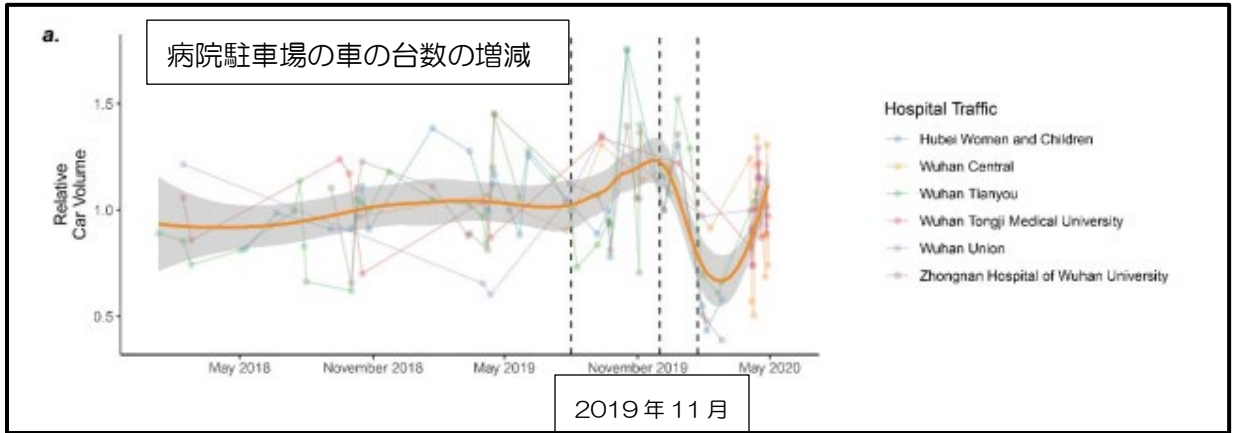
DASH DIGITAL ACCESS to SCHOLARSHIP at HARVARD DASH.HARVARD.EDU

HARVARD LIBRARY Office for Scholarly Communication

Analysis of hospital traffic and search engine data in Wuhan China indicates early disease activity in the Fall of 2019

患者が報告される前の、2019年9月と10月における武漢の6病院のうち5つの病院を対象にして駐車場の車の台数を評価した。2017年6月から2019年12月までの2年半の間の駐車場の台数と比較すると、2019年9月と10月には、下のグラフのように他の平均的な日と比較して駐車場の車が非常に増加していたと報じた。」(この内容を記載したハーバード大学の論文の表題を前ページに掲載した。ネット上で検索するとこの論文を読むことができる。【坂東】)

「そして更に下のグラフは武漢の人々が中国の検索エンジン(日本で使われているヤフーやグーグルのようなもの)であるBaidu(百度)を使い、新型コロナウイルス感染で生じる咳や下痢に関して検索した件数のグラフである。この検索数を考えると2019年9月と10月には武漢で新型コロナウイルス感染症と同じ病気が蔓延していたのであろうと推測できる。」



「第7回軍事スポーツ世界大会が2019年10月18日から武漢で開催された。この大会は軍人にとってのオリンピックのようなものであり、ある種の軍事訓練も同時に行われた。この大会は世界の109カ国から9308人の軍人選手が集まり、27種類329競技で争われた。25カ国は100人以上の軍人選手団を派遣していた。その中にはロシア、ブラジル、フランス、ドイツ、ポーランドが含まれていた。中国政府は23万6千人のボランティアを募り、90のホテルを用意し、2000人以上の運転手も動員した。しかし、この大会を記録した公式ホームページは現時点では視聴することができない。なぜ削除されたのかは不明である。

この大会期間中に、参加した軍人選手の多くに発熱、咳、痰、下痢といった新型コロナウイルス感染症と同様の症状が出現した。The Financial Post というカナダの新聞がカナダ陸軍選手にインタビューして、その内容を次のように記載している。『武漢の人口は1500万人だが、なぜかロックダウン状態にあった。不思議に思って尋ねると、この大会に参加した軍人選手が武漢内を移動するのを容易にするためと説明された。私は武漢に到着してから12日間、熱が出て、悪寒も強く、嘔吐し、眠られなくなって非常に体調が悪くなった。大会を終えてカナダに帰国する機内では60人のカナダ選手団はカナダまでの12時間のフライトの間、飛行機の後方に隔離された。我々は咳から下痢まで

種々の症状に悩まされていた。』

その軍人選手は帰国後に自身の症状が悪化するにつれて、家族にも同様の症状が生じたと明らかにした。同様の報告はドイツ、フランス、イタリア、スウェーデンの軍人選手からも寄せられた。

武漢での軍人スポーツ世界大会に代表団を派遣した少なくとも4カ国の国内で、2019年11月と12月とに新型コロナウイルス患者が発生したと確認されている。これはこの疾患が中国武漢で発生したとするニュースが公表される前の出来事であった。

・イタリア：2021年2月にイタリアの研究者達がCDC（アメリカ疾病予防管理センター）の医学雑誌にミラノの4歳男児について報告している。この子は2019年11月21日に咳がひどくなった。その時に採取していた検体を後日分析したところ、新型コロナウイルスに感染していたことが判明した。この子の発症はイタリアで第一例目の新型コロナウイルス感染症が発生したとする公式発表に先んずること、3か月前の出来事だった。この子には外国旅行の既往はなかった。（Emerging Infectious Diseases, Feb. 2021, 27(2)）

・ブラジル：ブラジルの研究者たちは2021年3月に次のような報告をした。新型コロナウイルスに感染した患者は長期間、彼らの消化管からウイルスを排泄しうることがあると分かっていたため、ブラジルの下水を分析することとした。2019年10月から11月にかけてブラジルの下水道から採取したサンプルを分析したところ、2019年11月27日の下水から新型コロナウイルスを確認した。このことはこの時期にすでにブラジルでは新型コロナウイルスが存在していたことを示した。アメリカではじめての新型コロナウイルス患者が報告されたのは2020年1月21日であったが、それに先立つこと2か月前の出来事であった。（The Science of the Total Environment, 8 March 2021, 778:146198）

・スウェーデン：スウェーデンの衛生行政機関は次のように発表した。スウェーデンでの新型コロナウイルス患者が発生したのは2019年11月である。（Public Health Agency 5 May 2020）

・フランス：2019年12月27日にインフルエンザ様の疾患で救急受診した42歳男性の検体を後日再度確認したところ、新型コロナウイルスを検出した。彼は中国との関係は全くなく、発症前に外国旅行もしていなかった。そして彼の子供のうちの一人には、この男性に症状が生じる前に同様の症状が生じていた。フランスで最初の新型コロナウイルス感染症患者は2019年12月27日に発生していたと推測した。（International Journal of Antimicrobial Agents, 3 May 2020, 55(6) 106006）

以上のように、フランス、イタリア、スウェーデンから武漢の軍事スポーツ世界大会に参加していた軍人選手は、武漢に滞在中から新型コロナウイルス感染症と同様の症状を訴えていた。二大陸に渡る四つの国で確認された新型コロナウイルスの起源は同一と推測される。世界中にこの感染症が広がってしまう前に、このウイルスが武漢で初めて人に感染したとするなら、この第7回軍事スポーツ世界大会がこの疾患を世界に広げた重要な出来事だったということになる。」

・結論

「当初は武漢の海鮮市場がパンデミックの起源であろうと推測されたが、種々の調査結果は武漢ウイルス研究所から漏れ出たウイルスによってパンデミックが引き起こされたことを示唆している。以上をまとめると、次のようになる。武漢ウイルス研究所がコロナウイルスの機能獲得研究のために行った研究履歴があること、BSL-2という低い安全性の研究室内でコロナウイルスが人に感染しうるようにするゲノム編集の研究を行っていたこと、を指摘することができる。そして、世界で最も数多くのコロナウイルスの標本を保管している武漢ウイルス研究所がその内容を開示すれば、研究所の一人または数人が誤ってウイルスに感染し、それを研究所外に流出させてしまうことで感染が拡大したという推測がもっともらしくなる。

結論として、これまでに述べてきた証拠や中国政府が行ってきた隠ぺい工作を考えると、今回のパンデミックの原因は、武漢ウイルス研究所からの流出であるということが強く示唆される。」

以上が「アメリカ下院外交委員会 共和党スタッフからの報告書」の概要です。続いてバイデン大統領の指示で提出された報告書の概要を記します。

§ アメリカ情報長官室からの追加調査報告書

今年5月26日にバイデン大統領は、新型コロナウイルスの発生源に関して再調査し、90日以内に報告するよう指示を出しました。その命令を受け、今年8月27日に、アメリカ政府の情報機関を統括する国家情報長官室が、新型コロナウイルスの起源に関する評価報告書を公表しました。

この報告書は今回の『藍色の風』の前半部分で記載したアメリカ下院外交委員会共和党報告書と比較すると、極めてシンプルなものでした。2 ページの写真で示したように、英文 1 ページちょっとの文章量しかありません。確認できるような証拠の提示は皆無で、結論だけを記載しています。その内容を和訳してお知らせしますが、原本を読んでみたい方は以下の単語で検索すると原文が表示されます。(Unclassified Summary of Assessment on COVID-19 Origins)

この文章の最初に「The IC assesses that～」とあります。「The IC が that 以下を評価した」となりますが「The IC」とは何でしょうか？これはインテリジェンス・コミュニティを略した「IC」です。世界各国には政府が主導する複数の情報（諜報）機関があります。アメリカ合衆国では CIA（中央情報局）NSA（国家安全保障局）FBI（連邦捜査局）NRO（国家偵察局）などがあります。それぞれの組織は独自に活動していますが、あるテーマに関しての情報収集の結果が常に合致するとは限りません。そういった場合に、各情報機関の活動を調整し、情報を一元化する組織が必要になります。その組織をアメリカではインテリジェンス・コミュニティ（以下 IC と略す）と呼びます。アメリカの IC は国家情報長官室が統括し、その下部に前述の CIA など 17 の情報（諜報）機関があり、それらを束ねています。

日本のインテリジェンス・コミュニティは内閣情報会議で、その下部組織として合同情報会議があります。内閣情報会議は国内外の内閣の重要政策に関する情報を総合的に把握するため、年に二回開催されています。また、合同情報会議は内閣情報調査室や外務省、防衛省、警察庁、公安調査庁などの情報活動に関わる機関の調整を隔週で行っています。2008 年からは財務省、金融庁、経済産業省、海上保安庁もこの会議に加わっています。こういった情報（諜報）機関は各国に存在しています。

さて、このたびの文章はアメリカの IC である国家情報長官室から発表されたものです。全文を和訳要約しておきます。

「新型コロナウイルス感染症の原因である SARS-CoV-2 は、遅くとも 2019 年 11 月までに中国武漢地域に出現して小さな集団で人に感染した。それが 2019 年 12 月の武漢での集団感染につながった。IC は重要ないくつかの問題点について IC 全体で合意できた。そのうちの一つは、このウイルスは生物兵器として作成されたものではないということだ。またほとんどの情報機関はこのウイルスがゲノム編集でウイルス遺伝子に手を加えて作成されたものではないだろうと判断したが、確証があるわけではない。しかし二つの情報機関はそのことに同意する十分な証拠はないとした。種々の調査の結果、新型コロナウイルスの起源に関して、すべての情報機関は動物由来感染症と武漢ウイルス研究所から漏れ出た事故という、二つの仮説は十分あり得ると判断した。

IC 内の 4 つの情報機関と国家情報会議は次のように判断した。人間の最初の新型コロナウイルス感染は、新型コロナウイルスに感染した動物から普段の生活の中で人に感染したか、または、ウイルスの遺伝子情報が新型コロナウイルスと 99%以上似通ったウイルスに人が感染して発生したという二つの可能性があるとして判断した。しかし十分な確証があるとは言えないとしている。

一つの情報機関は、最初の人への新型コロナウイルス感染は、武漢ウイルス研究所での実験操作や動物の取り扱い方、また標本抽出時などの操作ミスの結果生じたと評価した。これはある程度あり得ることとしている。

三つの情報機関の分析者はこのウイルスが自然に発生して感染したと考えるもの、武漢ウイルス研究所から漏れ出して発生したと考えるもの、またいずれもあり得ると考えるものがいた。しかし、いずれももっと情報がなければ的確な判断ができないとしている。

IC 内部の情報機関によって見解が異なったのは、それぞれの情報機関が報告書や科学的出版物をどのように考察したか、また各情報機関における理解力や科学的知識の差によって生じたものであろう。

動物との日常的な接触によって感染が発生したのか、または武漢ウイルス研究所が新型コロナウイルスまたは新型コロナウイルスが出現する前に新型コロナウイルスに近いウイルスを扱っていたかどうかといった情報がなければ、IC は新型コロナウイルス感染症の起源を断定的に説明することはできないだろう。IC のみならず全世界の科学団体は、初期の新型コロナウイルス感染症例の臨床経過や完璧な疫学データを入手できていない。

最初期の感染症例が発見された場所やその症例が職業上の理由でウイルスに曝露したかどうかといった情報が得られれば、今回の報告の内容も変更される可能性がある。

新型コロナウイルスの起源を決定するためには中国政府の協力が必要になるが、中国政府は世界的

な調査を妨げており、情報共有にも抵抗し、調査を要求するアメリカや他国を非難している。中国政府のこういった反応は、中国政府自身がこの調査の行きつく先が分からず不安感をもっていることに加えて、国際社会がこの問題を利用して中国に圧力をかけているという苛立ちをも反映している。」

§まとめ

こうしてアメリカから提出された二つの報告書を読み比べてみると、バイデン大統領の指示で提出されたアメリカ情報長官室からの追加調査報告書は、いかにも簡単で具体的な証拠の列挙は何もありませんでした。この報告書を読んで、新型コロナウイルスの起源を推測することは不可能です。アメリカの情報機関が収集した情報を開示すれば、それなりに推測もできるでしょうが、そういった情報開示は皆無でした。「最初期の感染症例が発見された場所や、その症例が職業上の理由でウイルスに曝露したかどうかといった情報」が無い限りは、正しい結論に到達することはできないでしょう。アメリカの情報機関の間で結論に差異が生じたなら、集めた情報を突き合わせて何が正しいかを討議すれば済むことでした。そういったことを行った形跡はなく本当に素っ気ない内容であり、アメリカ国民はこの報告書に納得したのでしょうか？共和党が求める Peter Daszak 氏の議会証言も必要でしょう。

それに比べ、アメリカ下院外交委員会共和党スタッフからの報告書は多くの情報を列挙し、新型コロナウイルスの起源を考えるに際して、非常に参考にはなります。ただ、この報告書はいわゆる状況証拠の列挙にとどまっており、直接的な証拠は開示できていません。類推だけで結論づけることには無理があります。こういったことを考えると、やはり中国政府が世界の要求に答えて、WHO をはじめとした第三者調査機関の再調査要求に応えることがどうしても必要と思います。

ただ、そういった調査に際しては利害関係者が関与せず、第三者機関が行うべきです。なぜなら WHO が 2021 年 1 月 14 日、国際的な専門家 10 人によるウイルスの起源調査団を中国に派遣しましたが、その人選に問題がありました。というのは、WHO は調査団のメンバー選定を中国政府が行うことを許可したのでした。そしてアメリカ代表として選ばれた人物は、アメリカのエコヘルス・アライアンス代表の Peter Daszak 氏でした。武漢ウイルス研究所に資金提供していた人物が今回の調査団の一員に選ばれていたという事実は、WHO の独立性、中立性が疑われる明確な証拠になりました。

また、調査への中国の圧力も報じられています。ワシントンポスト紙は調査団団長であったデンマークのピーター・ベン・エンバレク博士のコメントを右上のような見出しで、

World
In new documentary, WHO scientist says Chinese officials pressured investigation to drop lab-leak hypothesis

今年 8 月 12 日に掲載しています。それによると、調査団の中国人研究者は「研究所流出説」について今後は具体的な調査を勧めないという条件付きで、調査報告書に記載することを認めた由です。この調査団の結論は、ウイルスの研究所流出説を否定し、動物が発生源の可能性が高いというものでした。公的な機関の報告書だからといって、頭から信用してはならないという好例でした。興味のある方はこの報道をインターネット上でご覧下さい。なお、WHO の姿勢にも最近、少し変化の兆しが見られています。事務局長のテドロス氏は「早い段階で、武漢ウイルス研究所がパンデミックの起源だという選択肢を外そうとする圧力があった」と述べています。

また、IC が少し煮え切らない報告書を提出するに至った理由の一つとして、アメリカの公的資金が武漢ウイルス研究所に提供されていたという事実も影響しているのではないかと私は推測しています。もし、新型コロナウイルスが武漢ウイルス研究所から漏れ出てパンデミックを引き起こしたと結論づけられると、今回のような悲惨な事態の発生が研究所の研究目的からは予想できなかったとは言え、武漢ウイルス研究所に公的に肩入れしていたアメリカの責任も問われるかもしれないからです。

いずれにしろ、感染初期の患者群の検体や疫学データ、また武漢ウイルス研究所のデータが開示されなければ最終的な結論はでないのだろうと思います。今回の『藍色の風』を読まれて、新型コロナウイルスの起源に関して、皆さんはどのように考えられるでしょうか？

【坂東】

引用文献

- The Origins of Covid-19 : An Investigation of the Wuhan Institute of Virology (アメリカ下院外交委員会共和党報告書)
- Unclassified Summary of Assessment on COVID-19 Origins (アメリカ情報長官室の追加調査報告書)